

住宅部会ゼミナール講演報告

8月31日(水)、「人口減少下の住宅循環システム構築」をテーマにあいおいニッセイ同和損保新宿ビル(東京都渋谷区)にて住宅部会ゼミナール2016を開催しました。



東京大学大学院 工学系研究科 建築学専攻教授である松村 秀一氏より「民主化する建築」をテーマにご講演いただきました。講演概要は下記のとおりです。

<松村 秀一氏 プロフィール>

1957年生まれ。東京大学工学部建築学科を卒業後、東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程修了。ローマ大学客員教授、トレント大学客員教授、南京大学客員教授を経て、2006年より東京大学大学院 工学系研究科 建築学専攻教授。

民主化の定義

『民主化』という言葉は、捉え方や定義などによって様々な使われ方をするが、ここでは我々が暮らす環境について、我々自身がどの程度主体性を持って関わるか、その関わりが深くなる状態を『民主化』と定義する。

これまでの建築は大きく3つの世代に分けられる。

第1世代の民主化 ～建築の近代～

第1世代は『マスプロダクション』や『量産』がキーワードで、国民皆に近代的で健康的な生活が送れるような住宅を供給することを目標としていた時代であった。

こうした背景により、量産に適した材料や工法等が誕生した。バックミンスター・フラーは、『アルミ合金』に着目し、居住機械という名前が付いた住宅「ダイマクション・ドウエリングマシン」を発明した。これは、住宅の全部品が長さ3m程の1つの筒に納まり、この筒を運べば世界中どこでも住宅が建築可能になるという考えに基づいたものである。

次に、フランソワ・アンネビックが発明した『鉄筋コンクリート』である。従来の石を積み上げるのに比べて、セメントと工業材料、そこに砂と水さえあれば、型に流し込むことで次々に出来上がるため、非常に量産に向いている材料と言える。

さらに、釘の量産化と製材の機械化に伴い、大量の釘と小さな部材を活用して量産性を高めた木造工法『バルーンフレーム工法』が誕生したのもこの時代である。

アメリカではプレハブ住宅の建築を推進する動きが活発となり、ヴァルター・グロピウスとコンラッド・ワックスマンはジェネラルパネル・コーポレーションという会社を作った。ジェネラルパネルは、壁・天井・床に全

て同じ1種類のパネルを使用し、接合部はどの方向でも組立て可能としたものだった。また、ビル・レヴィットが17,000戸程度の大規模な建売住宅地「レヴィットタウン」を最初に建設したのもこの時代であった。

日本では1960年から1973年あたりまでが第1世代にあたる。1963年の統計によると、住宅ストック2,110万戸、2,180万世帯でストックよりも世帯数が上回り、住宅のない世帯や1住戸に複数世帯が住むという状況であった。公団住宅に代表されるマスハウジングが起これ、画一的な核家族型のダイニングキッチン付住宅を国民皆に供給できればよいとされる時代であった。

第2世代の民主化 ～建築の脱近代～

1972年、ローマクラブが発表した報告書「成長の限界」が社会的に大きな変化をもたらし、1973年以降は“大きくなっていくことには限界がある”という意味で“Small is beautiful”という考えが出てきた。

第2世代に注目されたのは2つの新たな概念だった。

1つ目は『バナキュラー』で、英訳すると方言という意味だが、建築業界では地域独自の素材や間取り、暮らし方等、つまり、地域ごとの在り方を意味する。

2つ目は『システム』で、1940年代頃から始まった「一般システム理論」の“ある目的があって部分同士の関係を全体でつくりあげる”という概念を基につくられた。窓・壁・天井・屋根等の部分を何パターンか用意すれば、それぞれの掛け算でより多くのパターンが選択可能であるという考えであり、個別の対応性をあらゆる局面で増やしていくことを実現するものとして注目された。

一方で、画一的な住宅の量産・供給を行った第1世代への反動として『自由』を求める動きも出てきた。

まずは、『システム化されない自由』である。選択肢が最初から決められ、それ以外は選択できないという、ある意味拘束されたシステムではなく、“市場に流通する全ての部品から自由に選択・組合せて住宅をつくりたい”という考え方である。

次に、『建てる自由』である。ジョン・ターナーの著書「Freedom to build」に書かれた、“建てることは誰かに任せたり、政府が供給するものではなく、生きることそのものである。だからこそ建てる自由を獲得する必要がある”という考え方である。

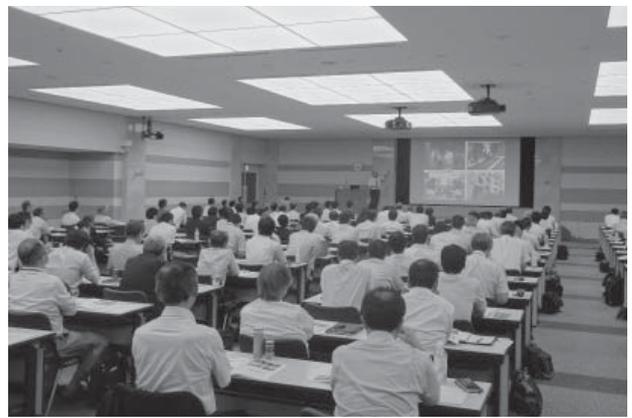
これらに付随して、“大勢に捉われずに自分達の好みで自分達の環境をつくる”という考えから、カウンターカルチャーやセルフビルド等が誕生し、「シェルター」や「ドームブック」という雑誌も発刊された。また、空間という要素を素人にもわかりやすい言葉でパターン化した、クリストファー・アレグザンダーの「パターン・ランゲージ」が発行されたのもこの時代であった。

日本では1980年代から1990年代が第2世代にあたる。1988年の統計によると、住宅ストック4,200万戸、3,780万世帯でストックが世帯数を逆転し、400万戸以上が空き家になりうる状況になった。コンピューター処理能力の飛躍的な向上により開発されたプレカットマシーンが多品種生産方式やマスカスタマイゼーションを可能にし、「箱の産業」が確立された。画一化されたものではなく、顧客の敷地条件やニーズ等にある程度対応しながら、作業プロセスを定型化することによって量産していた時代であった。

そして現在 ～第3世代の新たな民主化へ～

2000年以降が第3世代となるが、2013年の統計によると、住宅ストック6,060万戸、5,250万世帯で空き家率は13.5%である。これらの空き家を活用して、自分達の生き方を実現しようとする新たな動きが出てきている。現代の建物・知識・技術の十分すぎるストックを活用し、経済成長期のステレオタイプとは異なる『人の生き方』を実現させるための『構想力』が問われている時代と言える。こうした考えに至ったのはいくつかの書籍に衝撃を受けたためである。

まずは、ピーター・メンツェルの『地球家族』で、世界30カ国の平均的な暮らしとして、家財道具と家族の写真を掲載している写真集である。これを見て、住宅を写さなくても家財道具と道さえ写っていればその国の暮らしは表現できることに気付き、驚愕した。私が専門としてきた住宅は一体何なのか、家財道具と道だけで暮らしが表現できるのであれば、住宅とは法的な権利関係の境界線を物象化しているにすぎないのではないかと考え



させられた。

次に、都筑 響一氏の『賃貸宇宙』で、全国の木造賃貸アパートにおける暮らしを掲載した写真集だ。画一的なアパートでも、住む人の“自分はこんな風に生きるんだ”というクリエイティビティーがあれば、ここまで多様な個性が発揮できるのかと思い知らされた。

人口あたりの住宅総数を見ると、アメリカが0.42戸（2010年統計）に比べ、日本は0.48戸（2013年統計）で空間資源大国と言える。この豊かな空間資源に対して、どのように『人の生き方』と概念を取り入れていけるかが重要である。経済成長期は『人の生き方』が類型化されていたため、住宅メーカーでもステレオタイプによる規格型商品の販売が成立した。しかし、現代では働き方や住まいも様々で類型化できなくなっている。さらに、建物・知識・技術等のストックも十分すぎる程あるため、その選択肢も非常に多様化しているのである。

「3331 アーツ千代田」は、空き校舎をアーティストである中村 政人氏が活性化させた成功例である。中村氏はかねてより“日本の公的な芸術の中心地である上野とサブカルチャーの中心地である秋葉原の中間あたりに若いアーティストや様々な人が集えるアートセンターを創りたい”と考えていた。これがまさに利用の『構想力』であり、“空間があるがどうする？いくらで貸せるか？”という考えが先ではなく、“空間があればこう利用するのに”という構想が先にあった。そこで、たまたま千代田区の事業者募集と出会い、2013年には年間80万人が訪れるアートセンターになったのである。

他にも「カスタマイズ賃貸」、「オーダーメイド賃貸」、「セルフリノベーション」、「移住」等、非常に多様化した選択肢が誕生している。その中から誕生したカリスマDIY主婦は講師としても活躍し、話題を集めている。

時代のテーマは『箱』ではなく『場』へと変化しており、『場』をどのように活性化していくかが重要になっている。こうした『場』を自分好みの『構想力』で利用し、様々なSNS等で発信を行ってスターとなり、遂にはプロとして活動していくという、明らかに新たな段階の民主化に突入している。